

1名（イギリス在住）の延べ6名が短くて1ヶ月から長期で4年間、講師として来院した。

参加者：耳鼻科、皮膚科、小児科、眼科、麻酔科、脳外科、外科、歯科、看護部から計16名が参加し、平均7～8名の会員数で維持された。

〔考察〕 (1) 「図書室の英会話」として院内で広く知られ、中絶後の現在も院内はもとより院外の退職者からも時々問合わせがあることは図書室の広報活動として十分に意義があったと思われる。(2) 閉鎖的になりがちな部科間交流が、英会話を媒介として促進され医療の情報交換にも益する結果を生んだ。(3) 英会話を院内で習得できることにより多忙な職員の時間的節約となった。(4) 財政的に個人負担としたため、一定以上の会員数の確保が常に課題となった。

4. ま と め

(1) 図書館の広報PRについて、利用方法や新着書の案内は病院図書室でも必須のこととし

て掲示や配布による方法で一般化している。

(2) 館報の発行やコンテンツ・サービスなどの直接的な広報活動はさらに効果的だが、病院図書室では担当者の負担が大きく継続は困難な場合が多い。

(3) 病院図書室においては担当者の負担が少なくても参加者の興味深い企画活動なら図書室活用の面からもPR的にも効果的と思われる。

(4) 読書会と英会話サークルは少規模な集まりが利点であり、過度な義務や負担もなく知的興味や実利性も高いことから長期に継続した。これが図書室の存在感をアピールする結果となった。

(5) 業務とは離れた趣味的企画であるため勤務時間外の活動として割り切ることが必要で、参加もしやすい。また経費も自己負担とするが、参加人数には影響しないと思われる。

(6) 公共図書館や大学においても講演会、展示会、映写会やオーディオ・コンサートなどそれぞれの方法で企画行事が行われており、図書館の間接的な広報PR活動としての意味を持っている。

3. 利用環境（利用条件）について

長谷川 湧子

1. はじめに

利用環境を整えるということは、利用しやすく、機能的で快適なスペースを利用者に提供することであり、利用環境を一定の水準にするということは、サービス内容の充実と共に利用者を図書室に惹きつける要因であると考えられる。しかし、病院図書室の現状は、「衣食足りて礼節を知る」の諺を借りれば、衣食＝施設、図書予算も少なく（足りず）、日々の業務に追われ、どうしたら礼節＝機能、快適さを求めたらよいか思案しているとい

う状況ではなかろうか。Hazyな要素も含む利用環境を「衣食は足りずとも」どのように整備していったらよいか、どのような点に留意したらよいかを考えたい。

2. 利用環境を考える上でのポイント

(1) 利用者の行動パターンを掴んでおく

利用者の基本的な行動の動線を、しっかりと認識しておく。閲覧、書架の配置、カウンターでの手続きなど、どういうパターンで利用者が行動するか、どういう行動の選択をするか、本や物をどのように移動するか等ということであ

る。

(2) 自分の図書室の特徴と欠点を掴んでおく

他機関の図書室等と比較して設置主体別による特徴や、利用状況の傾向、統計データによる蔵書数、増加冊数等の数量的把握をふまえて、客観的に自分の図書室の特徴を掴み、物理的環境でどういう点が不足か、あるいは利用者がどういう要望を持っているか、どういう点が長所であるか問題点をしばっておく。

(3) 利用者に快適さを感じさせるものは何かを知る

病院図書室では、公共図書館のような幅広い利用者層を想定するわけではないが、利用者の活動に心地好さを感じさせる視覚的、触覚的なものは共通する。これは司書自身のセンスが大きくものをいうと思うが、環境条件を整えていく上で、おおむね大多数の人々に好感と賛同を得られるような選択を物心両面でできるように心掛ける。司書自身が不快と思いつつながら図書室で働いていたら、利用者が快適さを感じるであろうか？安全性、清潔、安定感などと共によりサービスが提供されるよう配慮をしているという感じを利用者に持ってもらうことは〔ドアを開けただけでその場所の雰囲気伝わってくる〕私達の経験と重なるものがあると思う。

(4) 利用者に快適さを感じさせる具体的な要因を知る

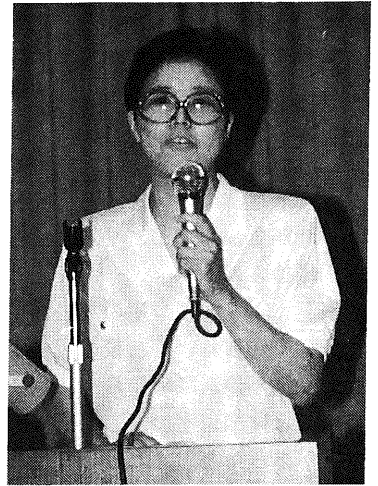
快適な居心地好い雰囲気を作るものとして、周囲の状況、温度、湿度、換気、照明、音響、色彩などの生理的な分野に対する環境要因と、書架スペース、閲覧室、AV機器など情報収集の場としての環境を整える備品、設備など利用行動上必要となってくる環境要因がある。これらの要因の一つ一つは、生活環境の経験則を基に再確認し、利用行動を観察することあるいは利用者とのコミュニケーションで知ることができると考える。

3. 利用環境を向上させていくポイント

(1) 図書室のレイアウトを見直す

図書室の書架の配置、カウンター、ブラウジングスペースなど物理的な環境でスムーズに動

きやすいよう、図書室の全体のレイアウトがされているかどうかをチェックする。司書として理解しているつもりでも案内板やディスプレイが見にくかった



長谷川湧子氏

り、思わぬ障害物があったりする。またこういうことに利用者はあまり言葉をはさまないことが多く、従って司書が意外と気付かない面がありがちである。

(2) 環境要因を具体的に見直す

2(3)で述べた環境要因について見直してみる。司書の気配りやふとした切っ掛けやアイデアで利用環境が改善されることも多い。たとえば、読書するのに相応しい照明の角度や反射光は、司書自身が考慮すれば自ずと結果が得られ、また大多数の利用者は窓際の自然光を好み、他人と密着せず、適当な空間がある位置での閲覧を選ぶなどの行動傾向があり、その傾向に沿った選択ができるようにする。

(3) 予算的なバックアップを強化する

予算的な裏づけがなければ解決できないことばかりでもないのであるが、効果的な利用環境を作りあげていこうとすると、やはり切っても切れない予算面での問題がでてくる。器材、設備、備品などの購入については、病院の種々の制約により、司書の思いどおりに進まないことが多いが、利用者側の図書室のよき理解者となる人、発言力ある人に図書室のバックアップをしてもらい、また図書委員会があるところでは、委員会と協同で図書室全体の計画を推し進めて行くのも一つの方法である。また、経理担当者、あるいは他の院内職員との話し合いの中から、どのような購入方法があるかを知り、具体的に実

現可能な方法があれば挑戦してみるのもよい。当院図書館の例をあげると、レジデント研修のため、厚生省から臨床研修費補助金が研修病院に助成されるが、院内の研修委員会や図書委員会で検討後、補助金の一部を振りわけて24時間開館カードチェックシステム等の図書館設備の改善を行った。その他臨床研究費の一部を図書館の購入費に充当するなど、病院で規定された以外の予算で図書室の実施改善に使用できる可能性もあり、院内でのコミュニケーションを大いに利用することも考慮すべきである。

(4) 改革しようとする意志を持つ

ジェイン・コンドンの「半歩下がって」の中に「アメリカ人の女性は、朝、目を覚ますと、『アム・アイ・ハッピー?』と自問する。ハッピーでなかったら、仕事を変えるか、夫やパートナーを変えるか、ヘアスタイルを変える」という一節があるが、言葉どおりに取るのは、日本の女性にはあまりに跳びすぎかも知れないが、これは快適か?居心地がよいか?と自問して否であったら、「ヘアスタイルを変える」程度の改革は、それ以上の改革も勿論、行おうとする意志を持つことが必要ではないかと思う。可能な限り、最善の方向に持っていくことは、ある

いは、持って行こうと努力することは、利用環境を整備していく上でも大事なことである。

4. ケースレポート：24時間開館システム

利用環境の整備の一例として当院図書館では1987年3月に24時間開館システムを実施したのでその経過を報告する。

(1) 24時間開館システムの導入

当院図書館では、10数年以上前から医師から夜間、休日利用ができるようにして欲しいという声がかかなり強くでていた。図書委員からの再三にわたる要請で管理運営部門で検討し、司書の増員を行わずに、管理上の問題がなく、利用方法も図書内規に明記できるようなシステムで実施することとなった。実施するにあたって考慮したのは、以下の条件である。

- ① 日時を限った開館時間の延長ではなく、いつでも利用できること。
- ② 無人で管理が可能なこと。
- ③ 入退室が簡単であること。
- ④ 利用者の責任所在がはっきりすること。
- ⑤ 図書館側が利用状況を把握できること。
- ⑥ コストを低く抑えること。

以上の6つの条件を検討した結果、カードチェックシステムを導入することにした。

利用方法は院内職員、医師等、利用者には図書館の夜間利用専用の磁気カードを、前もって配布し、このカードを図書館の夜間専用の入口にあるカードリーダー(図1)にさしこみ、4ケタの暗証番号(個人コード)を押すと、10秒間開錠するので利用者はその間に入室する。館内のコントロールボックスには入館日、入館時間、暗証番号が自動的に記録される(図2)。

(2) 利用開始にあたって留意したこと

利用開始にあたっては、照明、防火、防犯、図書の紛失等に留意し、以下のように取決めた。

- ① 夜間専用のドアを別に設置し、ドアの開閉の都度、入口天井のスポットライトが1分間、自動的に点灯する。
- ② 図書館全体の照明のスイッチを夜間専用の出入口の側にもつける。
- ③ 通常の出入口の上部一部分に防犯上の意味

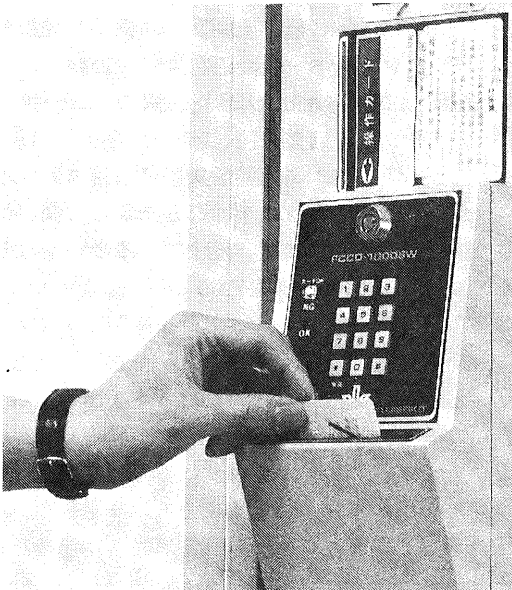


図1. IDカードとカードリーダー

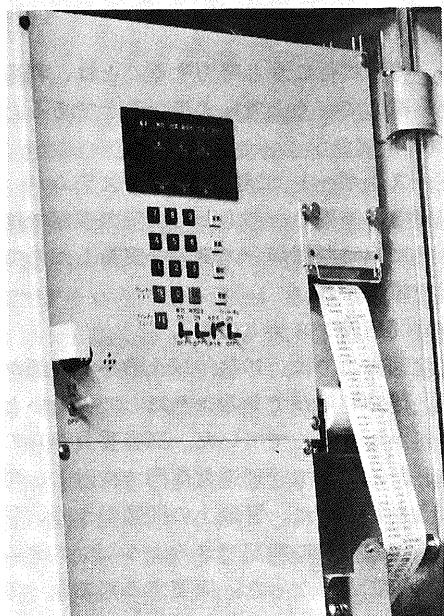


図2. コントロールボックス内の自動記録(右下)

も兼ねて、覗き窓のガラスを取りつける。

- ④ 図書館内全域を常時禁煙とする。
- ⑤ 退職者等の磁気利用カードは退職時に返納してもらいが、同時に図書館側で暗証番号を抹消する。

実施当初は、特に火災、図書の紛失が心配されたが、現在まで大きなトラブルはなく、これは、利用者と入室時間が厳密に記録されるという理由によるところが大きいと思われる。

(3) 利用状況

このシステムによる利用時間は、職員が不在になる平日の17時から翌朝8時30分までで、土曜、日曜、祝日は24時間とした。館内では図書の貸出、複写機、オンライン文献検索などが利用できるようにした。このオンラインの文献検索は、データベースセンター側と開館時間外も

接続できることから、年間の利用の35%が夜間、休日に使用されており(333件中122件)、利用者にとって検索が自由な時間帯で使用できるということが大きなメリットの一つとなっている。

夜間、休日の利用者数は年々増加しており1987年度が2192人、1988年度が2792人、1989年度が2900人となっており、通常の開館時間帯の利用者数の約10%から12%に相当する。

5. おわりに

病院図書室ではほとんどの場合、一人または二、三人の司書で運営されており、それ故に、司書の個性が業務に反映される比率が高い職場であると思う。図書室のサービス内容が重要なことは勿論であるが、大図書館とは異なった親しみやすく、居心地のよいスペースを小さいながらも利用者提供できるのではないであろうか。司書自身が持つパワーを潜在的なものも含めて、過大評価することもなく、過小評価することもなく、目的に沿って積み重ねていくことで、少しずつでも困難な状況を改善して行くことができると考える。

《参考文献》

- 1) Cohen, Aaron 他、栗原嘉一郎訳：図書館のデザインとスペース計画、丸善 1984
- 2) Salvendy, Gavriel 大島正光訳：ヒューマンファクター、同文書院 1989
- 3) 長谷川湧子他：関東逓信病院図書館におけるカードチェックシステム導入による夜間、休日開館2年間の実態、ほすびたるらいぶらりあん、15(3):62-64、1990